

第6回三木市学校再編検討会議 要旨

日 時： 平成31年2月22日(金) 午後7時～9時

場 所： 市役所5階 大会議室

出 席 者：

構 成 員 加治佐哲也 国立高等専門学校機構 監事
山下 晃一 神戸大学大学院 准教授
小山内政子 三木市区長協議会連合会 会長
神澤 廣美 三木市区長協議会連合会 副会長
安福 政明 三木市連合PTA 前会長
黒井 俊光 三木市連合PTA 前副会長
前田 信利 平田小学校 校長 (小学校校長会)
野口 博史 緑が丘中学校 校長 (中学校校長会)
事 務 局 西本則彦教育長、奥村浩哉教育振興部長、
生田淳仁学校教育課長、鍋島健一学校教育課副課長

傍聴人の数： 13名

1 開会、会長あいさつ

(会長)

三木市の学校再編検討会議は通算第6回になる。今日は、全国でも広がりつつある小中一貫教育の理解及びこれまでにいただいたご意見を整理し、喫緊の課題とされている志染中学校と星陽中学校と吉川4小学校について、今後の方向性を探っていきたいと思う。

三木市ではすでに「小中連携教育」の取組を進めているが、現在の三木市の学校の状況について事務局の方から説明を受ける。次に、「小中連携教育」の先にある三木市が今後進もうとしている「小中一貫教育」について、山下副会長から説明を受ける。特に「連携教育」と「一貫教育」の相違点などについて理解を深めたい。

2 協議事項

(1) 小中一貫教育について

(事務局)「小中連携教育」について

- ・小中連携教育は、小学校教育から中学校教育への円滑な接続めざす教育で、小中一貫教育は、9年間で貫かれた教育課程を編成し、系統的な指導をめざす教育である。
- ・三木市では、8中学校区ごとに、①学習指導、②生徒指導、特別支援教育、③行事、児童生徒会、部活動、④学校運営、教員連携の4つの柱で取組を進めている。
- ・実施例としては、相互の授業公開、中学校の教員が小学校で授業を行う出

前授業、小学生の体験入学、部活動見学などがあり、小学生の不安を取り除くことに効果をあげている。

(副会長)「小中一貫教育」について

・小学校と中学校の違いについて

小学校の基礎基本重視の学習から中学校での応用的な内容に変わり、学校生活上も学校文化、指導方法、教職員の関わり方などに違いがある。

・子どもの変化について

身体的には確実に早期化が進み、心理的成熟は逆に遅くなっている。心身の変化に加え、学力、学校生活の難しさから、小中間でギャップを感じている。

・子どもの変化が学校に与える影響について

小中間のギャップの深刻化やつまづいた際のフォローが、今の6-3制では対応が難しいことがある。大人の過去の経験が、今の学校現場では当てはまらないことがある。

・解決法としての小中一貫教育について

心身の発達にあわせて、6-3制から、4-3-2制などを取り入れて、柔軟に対応できる。つまづいた内容を学び直すことができる。

・残された課題について

今の制度の良さの継承、望ましい段差の設定、施設間の距離の解消などを考慮した教育が望まれる。

(委員)

中学校の教員は、高い教科の専門性もっており、小学校の教員は、広い範囲で教科を指導できるという技量の高さをもっている。

小学校では、中学校の学習内容を考え、「今はここをしっかりとおさえておかないといけない」と意識して指導に当たり、逆に中学校では、小学校での子どもの学びや育ちを理解しながら指導にあたるなど、小学校と中学校の教員が、相互に理解を深めた上で指導に当たることが大切である。

6年生の担任教員は、「中学校ではこういう力が必要になるよ。この1年間でこういう力を付けていかないと中学校で困るよ。だからそこまでがんばろうね。」などと、機会があるごとに話している。

それが小中一貫校になったら、教員同士がいつでも相互に交流や協力がし合えるので、大きな効果が期待できる。

(委員)

今の子どもは、昔より自由奔放にしていると思う。学校生活などの環境によって年々子どもは変わっていく。ある程度、高学年になると、先生方の指導もあり、落ち着いてくるが、入学した当初は落ち着かない子が多い。

(副会長)

子どもは社会の中で生きているから、変わっていくが、学校教育は、100年たっても変わってないところもある。座って授業を受けること、学年ごとに物事を進めること、小学校と中学校の関係などは全然変わってないかもしれない。大切に残していかないといけないものもあるが、これから変わっていくこともある。

(委員)

5、6年生になると、男の子にしても女の子にしても色々な変化が現れてくる。小5から教科担任制を取り入れているが、とても良いと思う。中学校2、3年生になると、男の子は、悪ぶったりしたい年頃になると思うが、小中一貫校となり、同じ校舎内に、いつも小学校1年の子ども達がいたら、悪ぶったりする子が少なくなると思う。

(副会長)

3年間ではなく、9年間という人間関係中で、もっと小さい子が身近にいて、年長者であると意識することで、節度が保たれることがあるかもしれない。

(委員)

三木市が小中連携教育に取り組む中で、小学校と中学校の垣根がなくなり、9年間という長いスパンの中で、いろいろな取組を行っているイメージが良く分かった。小学校と中学校の垣根がなくなって、負担が増えるかもしれないが、いろんな考えが先生方にも生まれてくるかもしれない。子どもたちにとって、専門的なことを教えてもらえるチャンスでもあり、いい取組だと思った。

(副会長)

先生方も得意、不得意があるのでカバーし合うことが必要である。中学校の先生の良い取組が中学校内だけで完結したり、その先生の周囲だけがその恩恵に与ったりしている。小学校もまた然りだろう。私は、学校組織も研究しているので、先生方の力をもっと結集した学校づくりが大切だと考える。

(委員)

小中一貫教育の説明を聞きよく分かった。取組の本来の意味を整理ができた。例えば、小学校の先生は今教えている事が中学校へどう繋がっていくかということあまり意識していない。中学校の先生は子どもたちがどういう風にこれを習ってきたかをあまり意識していない。子どもがどういう事を習ってきたかを知らずに教えると混乱する。

前任校では小中連携の一つの取組として、小中合同研修を夏休み中に開き、教科書を持ち寄り、それぞれの教科書を見合って、つながりを確かめた。その中では多くの気づきがあった。

小中一貫教育に急に変わるというのではなく、これまでの小中連携教育のノウハウの蓄積が役に立つと考えている。

(副会長)

これまでの蓄積があるので、次のステップに行っていただきたいし、今、もう十分いけるんじゃないかという気はしている。温度差はあると思うが、進めていただければと思った。

(委員)

小学生にとって、リーダーとしての自覚がぱっと芽生えるのは、小学校2年生だと思う。1年生が入学してきた時に、1年生と2年生が縦割り班を作り、1年生を引っ張って校舎を案内している姿を見ると、2年生らしくなったと感じる。

(会長)

小学校6年間は6～12歳、中学校3年間だと12～15歳の異年齢による人間関係だが、小中一貫校だと6歳～15歳の異年齢の子どもたちが一緒に生活する。広い人間関係が生まれることで、効果は期待できる。全国的に連携から一貫校への取組みの流れは進んでおり、主流になってくると予想している。

(2) 喫緊の課題について

(事務局)

資料説明① 志染中学校、星陽中学校、吉川4小学校について、

前回の会議で意見聴取を行ったが、各地域や保護者の方が考えている主だった考えについて各地域ごとに述べておられた。この機会に紹介する。

【志染中学校区】

- ・地域には、学校を残したいという意見と子どものことを考えると、統合は仕方がないという意見の両方がある。
- ・半年間、説明会等で意見交換を行ってきたが、部活動や多くの人の中で教育を受けられるという理由により、保護者は、ほとんどが賛成の意見である。
- ・地域が衰退するという不安がある。
- ・小学校の統合については、まだ考えていない。小学校はこれからも小規模でもいいのではないかという意見もある。
- ・志染地区の地域住民による、まちづくりのコンセプトが無い。人が居つかず、なかなか子どもが増えないスパイラルにはまっている。
- ・統合するにしても、統合する先の学校の情報が欲しい。

【星陽中学校区】

- ・口吉川地域としては、通学負担の少ない学校との統合を望んでいる。
- ・口吉川地域内で意見集約を今している状態である。
- ・細川地域では、星陽中学校の統合については、賛成の意見が多い。
- ・細川地域では、地理的条件や生活圏の問題から三木中学校との統合を望んでいる。

- ・瑞穂地区は吉川中の方が近い方もいるが、統合や人口減少の経験から、大きな規模の三木中へ行きたいという考えである。
- ・小学校は、教育に支障が出る限界になるまでは存続させたい。
- ・1学年10人ほどしかいないのは、適正だとは考えていない。
- ・星陽中学校は2つの地域があり、地域により温度差がある。
- ・地域ごとに2つに分かれて統合することも仕方がないと考える。
- ・通学に多くの時間を使ってほしくない。

【吉川中学校区】

- ・保護者は「仕方なく」という思いを持って、約8割の方が統合はやむを得ないという考えであった。反対も2割はいる。
- ・合併に賛成の方が多いと感じている。決定した情報は、できるだけ早く伝えて欲しい。
- ・小規模校のメリットを活かして、存続できる学校づくりをしたい。
- ・先生の目が行き届くという少人数のメリットがなくなってしまう。
- ・小学校がなくなることで、地域が衰退することになるかもしれない。
- ・自力通学（徒歩通学）には、その道のりで育まれる（学べる）こともある。
- ・合併を機に、アフタースクールの充実など、何か取組ができないかと考えている。

（事務局）

資料説明② 国の通学方法の基準及び三木市立学校の通学の状況について

- ・通学に係る国の基準（徒歩や自転車による自力通学）は小学校おおむね4km以内、中学校6km以内となっている。地域の状況などにより、基準を定め、徒歩、自転車、バスの中から適切なものを選択する。
- ・通学時間に関する国の基準は、おおむね1時間以内だが、多くの保護者の意見は30分程度までとなっている。
- ・自転車通学を許可している6つの中学校で、最長通学者の平均距離は、約5.2km程度となる。
- ・小学校16校で、最長徒歩通学者の平均は、2.5km、吉川4小学校では、約3kmとなる。
- ・通学の距離は、通学方法を決定する上での1番大きな検討要素だが、地形、交通量、安全性等を考慮し、各校区ごとに基準を決め、通学方法を決定していく必要がある。

（委員）

配布資料には統合時期について、志染・星陽・吉川地区全てで、同じ表現がなされている。加えて、「来年度のできるだけ早い時期に統合時期を決定する」とある。仮に平成31年度の夏頃に決定をすると、1年から2年をかけて

準備し、3つの地区ともそのようになるのか。平成33年からと認識しておいていいのか。

(会長)

それを決めないと方針は出ない。準備というのは、通学方法、先生方の配置、教室をどうするのかなど、いろいろある。

加えて、子どもの心の準備、通学の準備や保護者の心の準備等を含めて来年度に決めたとすると、平成33年度くらいかなというのは考えられる。

ただ、かなり複式学級が進んでいる学校もある。近いうちに複式となる学校もある、事務局案を教えてください。

(副会長)

今後、全部の学年が複式学級になる学校が出てくると分かっているのに、そして手立てがあるのにそれを置いておくというのは理解できない。きちんと統合を進めていく方がいいと思う。神戸でも統廃合をやっている。通学路の変更などもあるが、いずれにせよ、その準備期間も三木市ほどではなかった。準備して進めていく合理的な期間があれば大丈夫だと思う。きちんと告知の仕方を考える必要がある。事務局としてどれくらいの準備を考えているのか。

(事務局)

子どもの心の準備もあれば、ハード面の準備もある。保護者や地域の意見として多かった1年から2年ほどの準備期間で、ある程度は整えていけると思う。

例えば、平成31年に決定して1年半と考えると、委員が言われた平成33年の可能性もあると考える。統合先、通学方法などを検討し、地域で話が整った段階で進めていくという手順である。

統合時期だが、地域によって状況が違う。通学の手段が早く整備できるか、子どもの減少が早く、緊急性が増しているか。また、教員配当の問題もある。学校が一つなくなると教員の配当枠が減るが、正規教職員全員がきちんと勤務できるようにすることが必要になる。このような理由から、3校区同時に統合を進めるとするのは厳しいと考える。話し合いや準備が整ったところから順番にしていくということになる。

(委員)

志染中学校を平成32年度から統合するという事は早過ぎるという意見があるようだが、「無理な気がする」というものではなく、課題の整理ができないため、平成32年度は無理であるということが理由だと思う。

統合する上での課題というのは集約されていると思うが、感覚的になんとなく早いような気がするということではなく、課題を整理する作業が大切だと考えている。

(会長)

学校が減ると教員の数は減り、その調整は相当苦労が予想される。特に兵

庫県の場合は、市町間の異動が少ない。先生が市外に出る事はほとんどない。本来、統廃合が起こったら県全体の問題だが、兵庫県の場合は三木市で解決しなければならない。

(副会長)

5 km であれば、通学時間は自転車ですごくいかかるか。

(委員)

自転車でも 20～30 分程度はかかる。志染中学校で一番遠い生徒も冬は辛そうだった。車で行くような最短距離ではなく、安全な道を通るため農道に入ったり、大回りしたりする。アップダウンも当然ある。

(委員)

吉川の子どもたちの一番遠い子はほぼ 10 km くらいではないか。自転車で山道に行くこともある。中 1 の 1 学期は自転車でも 1 時間ちょっとかかることもある。遠方の生徒は、保護者が送って来られる方が多かったと思う。

(副会長)

スクールバスの基準はどうなるのか。

(事務局)

明確な基準は示されていないが、国の自力による通学基準の 6 km 近くとなるような遠方者であれば、バス等の適切な方法を考える必要がある。

(副会長)

保護者の方の自己負担っていうのはないと思うが、スクールバスを検討していいのではないか。

(会長)

現在、三木市で別所小学校又は豊地小学校のスクールバスはどうなっているのか。

(事務局)

スクールバスを走らせているは、三木市で 2 校である。通学距離が長いから運行しているというのではなく、過去の統廃合等の経緯からスクールバスを運行しており、距離で決定したわけではない。

(会長)

どういう基準でバスを走らせるかなど、今後、通学方法は考えなければならない。来月に再度それぞれの地域での意見交換会を実施すると聞いている。そこでお聞きしたご意見や課題についても、今後の検討材料としていきたいと思う。

今後の見通しだが、これまでのスケジュール案では、学校再編検討会議から平成 31 年度末に実施方針の素案を示すという事になっていたが、統合先や統合時期など、もう少し具体的に議論する時間を要すると考える。したがって、3 月中としていた方針の素案をお示しする時期を延期したいと考える。

ただし、小規模化が進む学校については、喫緊の課題になっており、4月以降、学校再編会議の中で議論し、方針の素案を示すことになると思う。

3 閉会 副会長挨拶

会長から話があったように、今年度末に実施方針の素案を示す予定だったが、地域の方々からもう少しご意見をいただくということなので、ここは少し時間をかけた方がいいと判断する。

各地で学校再編に関わってきた経験から、三木市のように丁寧に進めているところはないのではないかなと思う。三木には三木の事情があると思う。10年以上前に事業仕分けで三木市に関った時には、根強い行政不信があった。しかし、今は、三木市の人全員が力を合わせて課題に対応しなければならない時代になっている。

学校再編に向けては、何よりも子どもにとって一番何がベストなのかということを考える必要がある。それは、自分の子だけではなく、地域全体の子ども、さらには市全体で考えなければならない。

日本は今から人口減少社会になり、これから50年先のことは誰にも分からない。だからこそ、一人一人が知恵を出し合っていく必要がある。自分の言いたいことだけを言うのではなく、相手の言うことをちゃんと聞きながら考えることが大切で、そういった雰囲気があるところは、学校再編も上手く進んでいくと私の経験から痛感している。